

齋藤月岑日記鈔

森
銑

荻藤月岑日記鈔

森 銑 三

齋藤月岑日記鈔

昭和五十八年六月十五日 第一刷発行

定価 二、八〇〇円

著者 森 銑 三

発行者 坂 本 健 彦

印刷所 (株) 第一印刷所

発行所 汲古書院

一〇三 東京都千代田区飯田橋二一五十四
電話(六五)九六四 振替東京二六〇三

©一九八三

目次

斎藤月岑日記鈔

1

広瀬六左衛門雜記抄

125

広瀬六左衛門雜記抄目録

306

自跋

313

齋藤月岑日記鈔

一

斎藤月岑の日記の原本すべて三十六冊が、東京帝国大学史料編纂所に所蔵されてゐる。第一冊が二年分併さつてゐる外は、すべて一冊が一年になつてゐて、正味三十七年分であるが、飛び飛びに九年分九冊欠本があつて、年代では、文政十三年即天保元年から明治八年まで、月岑の年齢でいへば、二十七歳から七十二歳まで、前後四十六年の長日月に互つてゐることになる。民間の一個人の日記で、かやうな長期に亙るものの現存してゐることは、まことに珍しいといつてよいであらう。それだけにまた九年分の散佚が惜しい気がするが、表紙に貼付した小紙片の通し番号が欠けてゐないのを見ると、すでに大学に入る前に欠本になつてゐたのであらう。

月岑の日記の各冊は、半紙四十枚乃至五十枚を縦に二つ折にして、同じく半紙を二重にしただけの簡単な表紙と裏表紙とをつけ、二たところを小捻りで綴じてゐる。一冊を一年分に当てゝゐるのであるから、一枚が七日乃至九日分に割り当てられることになり、各日の記載は大抵三四行に過ぎない。

月岑は、その三四行に、日々の天候、自己並びに家族の動静、社会的の出来事などを、極めて簡単に書きつけてゐる。そして記載した事項について批判を附し、感慨を洩しなどは殆どしてゐない。その記され

た事実も、前後の連絡の不自明のものが多く、このことが今少し詳かに知られたらと思はれる条も尠くないが、もともと日記は、その本来の性質として第三者に示すことを目的とせず、筆者自身の備忘たるに過ぎないのであるから、それを見て多くを要求するのは、する方が無理であらう。各日の記載は簡略にもせよ、とにかく月岑の日記は現存する分のみにても、四十年近くに及んでゐる。我等はそれを通して月岑の生活を知りその家庭を知り、併せて天保から明治へかけての動乱の最も劇しかった時代の世相の一端にも触れることが出来るのを喜びとすべきであらう。

月岑の日記の各冊には、表紙の内面に「帝国大学臨時編年史編纂掛」の朱印を捺した紙片が貼られてゐる。これによつてこの書は、史料編纂所がまだ臨時編年史編纂掛と称してゐた明治二十一年から同二十四年までの間に入つたのだつたことが知られる。明治二十一年は、月岑の歿後十年に過ぎない。この日記は、或はその頃齋藤家から大学へ寄贈されたものではなかつたらうかと想像されるが、すでに四十余年の歳月を経過した今日となつては、当時の事情を尋ねて見る古老もない。

月岑の日記は大学に入つてからこちら、殆ど利用さるゝことなしに、今日に至つたらしい。明治の中期以降、雑誌新聞その他に月岑のことが伝へられたのは、私の知つてゐるだけでも一再に止らないが、未だ嘗てその日記について語られたことを耳にしない。それがいかにも遺憾に感ぜられる。

よつて急に思ひ立つて、忙中閑を割いてその日記の抄出を作り、間々多少の註記をも附して、本誌に寄せることにした。しかし抄出はつひに抄出たるに止まり、物足りない感じの大いに伴ふものがあるが、日記の全部の公刊される日など、まだまだ近い将来には期待されないことであり、粗略な抄本でもなきには

勝るといつて貰はれるであらう。

月岑の日記の内容には、前にも多少触れておいたが、なほ抄出に入る前に、その総叙ともいふべきものを略述しておく必要があるかも知れない。

月岑はすでに知られてゐるやうに、神田雉子町に住んで、同町の外、三河町三丁目、同裏町、同四丁目、同裏町、並びに四軒町を支配する名主を勤めてゐた斎藤家の第九代である。そしてその日記を読んで第一に感ぜらるゝのは、名主としての月岑の生活がいかに忙しかつたことである。組合の名主達との交渉、町年寄との交渉が絶えずあり、時々南北の奉行所へも出る。御城へも呼び出されて出る。火事があればその都度出る。或は子供を代理に出す。五節句の御礼、祭礼、將軍の御成、異国人の通行その他、何かといつては出なくてはならぬ。加ふるに毎月十日には、極まつて虎の門の金刀比羅宮へ参詣する。その日に支障があれば別の日に行く。それについては真土山の聖天宮と浅草の觀世音へ参詣する。その外の社寺へも参拝する。開帳へ行く。見せ物を見に行き、芝居に行く。一人で行き、家族を連れて行き、同じ物へ何度も足を運ぶ。東都歳事記や、百戯述略の編著者であつた月岑は、さやうのことに人一倍の興味を持つてゐたらしい。

行く先々で知人を尋ねたりもするが、月岑の交友は、さまで広くはなかつた。また行く先々の料亭で支度をし、或は手軽に蕎麦を食べる。酒を飲むこともある。月岑の日記には記載の事実についての批判や感想を附してゐないと先にいつたが、たゞ例外として、諸所で食べたものについて、その醜惡を罵つてゐる箇所がなかなか多い。それらの点から食物にも趣味を持つてゐたことが知られて来る。

月岑が終日家にゐることなどは殆ど稀であるが、家へは来客が相当に多い。そしてさうした多忙を極めた生活の裡に在つて、既述の東都歳事記や、声曲類纂や、武江年表や、その他の述作をつぎつぎとし、日々の日記をも欠かさずにつけて行つたのである。

尤も武江年表の編述には、この日記が大いに役立つてゐるといふよりも、寧ろ武江年表の編述を予め念頭において、この日記をつけて行つたものとも解される。抄出に某日の条の下にと断つて出した箇所は、後日の追記になるものが多いらしい。本文の内にも追記が大分あるらしいが、それらは一々判別されない。武江年表は、今は国書刊行会の活字本も出来て広く流布してゐる。よつて私は、月岑の日記中の興味のある記事も、武江年表の方に採られてゐて、文章に大差のないものは抄出することを控へた。年表と抄出と併読していただくことが出来るならば一層ありがたい。

日記は文政十三年に始まる。同年は父幸孝が歿して月岑が名主の職を嗣いでからすでに十二年目になる。或はこの年以前の月岑の日記もあつたのではなかつたかと考へられぬこともないが、第一冊は第二冊以下と形式の一致を欠くものが多く、殊に最初の部分など、文字も特別に大きくて、他との調和を破つてゐることから考へて、月岑の日記は、やはり文政十三年からつけ始められたと見るべきであらう。

前書が長くなつた。

二

文政十三年、月岑二十七歳。この年十二月十日に年号は天保と改つた。

元日「晴天。早朝より年始に出る。昼後平田同道、外神田廻る、普勝氏、遠藤氏来る。」

平田は新銀町の名主平田宗之助、普勝氏は小網町一丁目の名主普勝伊兵衛、月岑の姉婿である。遠藤氏は東湊町二丁目の名主遠藤七兵衛、また月岑の姉婿である。

正月二日「曇、昼後雨。上田へ計行。上田文之助子来る。」

上田文之助は月岑の師、上田晚庵、通称八蔵の子か。

同三日「晴天。御城へ御年頭に出る。浅草并真土山、上野大こく天参る。」

同四日「晴天。八丁堀御礼、足痛に付山吹へ迄出、八丁堀へ不廻。」

山吹は鍛冶町の料亭の名、月岑等の名主達の月並の寄合がこゝで催されてゐた。

同五日「天気、風。三社流鎗馬見に行、八ツ時過帰ル、安間氏、相模屋、久先生来る。小網町より年玉来る。雪堤子留守来る。」

久先生は月岑の画の師匠谷口月窓の養子である。小網町は前述の普勝氏、雪堤は長谷川雪旦の子、また画家である。父と共に月岑の著東都歳事記や、声曲類纂の挿絵を描いてゐる。

同六日「天気。支配頭廻る。」

同七日「天気。御番所御礼に出る。」

御番所はいふまでもなく町奉行所をいふ。

二月十三日「雪旦子発会、不行。」

長谷川雪旦の家は、下谷三枚橋にあつた。

同十五日「下手談義の本かりる。」

下手談義は、宝暦二年に出た好阿の当世下手談義を指すのであらう。

同十八日「上田氏より使来る、著聞集跡かす。」

著聞集は或は古今著聞集ではなくて、馬文耕の江都著聞集か何かだったかも知れない。

三月四日「法事配り物くばる。」

同四日「組合より仏前へ香奠よこす。おとつさん御法事のなり。」

同九日「おとつ三、十三回忌仏事法善寺へ客よぶ。片岡氏、飯塚氏、小網町姉、遠藤姉、家内参。」

片岡氏は神田松永町の名主片岡仁左衛門、小網町の姉は寛政十一年の生れで、月岑よりは五歳上、遠藤の姉は享和二年の生れで月岑よりは二歳上だった。

同十二日「浅草開帳へ行、雪旦子へよる。」

閏三月四日「普勝氏へ行。後同道小石川心学聞に行。高崎有隣と云人也。」

高崎有隣は大島有隣と如何。

同六日「夜、亀次郎応挙巻物かへしに来る。」

同十日「おばあ三、おつか三、小網町へお出。久次郎も鳥渡行。」

同廿日「天気よし。遠藤氏へ行、酩酊とまる。」

月岑は晩年酒を好んだといふが、日記には酒のことはあまり見えてゐない。

同廿四日「河沢氏より十手出来る、代八匁。」

四月十一日「夜河沢氏隠宅へ行。茶事也。」

河沢氏は多町二丁目の名主川沢五郎太夫か。

同廿一日「すはらや来る。但いけの端。」

同廿五日「かさもりいなりへ額、かくべしのがく納に行。南一とくわし上る。」

南一は南鐙一片の略。

五月十五日「谷口月窓先生来る。」

谷口月窓のことは、月岑の、翟巢漫筆第二十四冊元治二年の記の内に、洲崎弁才天拝殿の天井に月窓の描いた童の絵を写して、その後「右谷口月窓先生、名世達、一号孟仙、寂照寺月仙老師の門人也。長寿にして、今年九十□歳、薩州侯渋谷の御やしきへ移り住す（分註。旧宅お玉が池、後八丁堀矢場、天保中高輪の御やしきへ移る）。養子久土目悦之進。」としてゐる。月岑の号も或はこの月窓から与へられたのではなかつたかと考へられる。月窓のことは、なほ慶応二年のその死の条に記さう。

同廿八日「朝、木村、岡村、河津同道、中野氏へ行。正保録借用一件。」

木村は新革屋町の名主木村定次郎、岡村は小柳町の名主岡村庄兵衛、中野は五郎兵衛町の名主中野五郎兵衛であらう。

八月十四日「八時昌麗尼死去。」

昌麗尼は月岑の祖母、すなはち長秋幸雄の妻になる人らしく思はれる。

同十六日「朝少し雨。昌麗尼葬式、直に千住へ行。千住寺教伝寺へとまる。」

同十七日「天氣。朝法善寺へ行。今日骨不埋。」

同十九日「天氣。七の日逮夜。法善寺よぶ。其外親類。」

同廿日「天氣。少し曇り。寺参り。此日御骨を埋む。芝ねへ三とまる。」

芝のねえさんといふは、日記の中にしばしば見えるがまだその人を確かめない。

同廿一日「天氣。渋谷宝泉寺并二本榎高野寺へ分骨納に行。」

九月朔日の条の後に「日忘れ、柏屋より司馬江漢作西遊旅譚借る。」とある。

十月十日「からしや来る。筑紫記行かりる。」

からしやは雑字者の石塚豊芥子、通称芥子屋十兵衛である。「豊芥」は普通ホウカイと読んでゐるが、からしやと読ませたらしい証左がある。筑紫記行は名古屋の商人菱屋半七こと吉田重房の著筑紫記行刊本十冊をいふのであらう。

同十六日「久次郎小網町より養子に貰受る。」

久次郎はこの年二歳だった。

同十八日「市左衛門、久次郎連、雑司ヶ谷へ行、綱渡り見る。」

月峯は日記の中で、自分のことをいつも通称の市左衛門に書いてゐるのである。

十一月八日「夜久次郎つれ、堅大工町へあやつり見に行。月夜。」

十二月三日「おつか三、片岡周介子へ御出。久次郎も行。」

片岡周介は歌人として知られてゐる片岡寛光、江戸名所図会に序を寄せてゐる人である。この頃は根岸

鶯塚に住んでゐた。

三

天保二年、月岑二十八歳。

正月二日「普勝氏、片岡周輔子被参。」

同廿七日「夜長さきやへ被呼琵琶をきく。山がせ勾当、山名井勾当、山岡勾当来る。」

二月十九日「天気。今晚六ツ時出生、女子、麻あさと号く。」

三月三日「あさ初の節句。」

同十二日「曇。小網町ねへ三、おげんと一所に、市左衛門元八まん様へ来る。桜とる。桜つけにする。」

同十六日「遠藤氏よりおとわほうそうこわめし来る。」

同廿二日「おあさ宮参の日、こわめしくばる。」

四月朔日「久次郎ほうさう熱発。」

同七日「久次郎水うみ初。」

同十二日「ふくらぼう、ほうさう本うみしまい也。大概かせる。」

ふくら坊は久次郎のこと、福良にも書いてゐる。その頬のふくれてゐたところから、月岑はこんな渾名をつけたのだつた。月岑はこの後にも、自分の子のことをしばしば渾名を以て日記の中に記してゐる。

同廿一日「片岡正三郎子、山本栄蔵子、岡部正太郎子同道、大師河原へ参詣、今日初て御殿山をみる。」

劇職にあつた月岑は、江戸を離れたことが殆どなかつたらしい。「五十にて四谷を見たり」といふほどではないが、品川の御殿山をも、三十に近くなつて、初めて見てゐるのである。

同廿七日「そうめんこしらへる。」

下に黒襟の女が素麵を食べてゐるところを描き、上に「おれん、むまい／＼／＼」としてゐる。その顔を特別に大きく、下ぶくれといふよりも、寧ろ凸字形に描いてゐる。林若樹翁は、月岑二十四の歳の戯作の人面草紙といふ自筆本を蔵されるが、それにも中の人物が、男女共にすべて凸字形の顔をしてゐる。そしてそのやうな顔に描いた理由は更に解らないとのことだつた。月岑の日記にも挿絵が所々にあるが、また多くは凸字形の顔である。些細なことではあるが、不思議といへば不思議である。

五月廿日「上田氏へ行、高島千春に逢。」

六月十八日「片岡正三子、同周輔氏来ル。」

七月廿二日「夕方、上田、河津、片岡氏へ行。片岡氏にて一桂筆の画卷借る。」
一桂は英一珪か。

八月六日「久次郎からこの髪をゆふ。」

同八日「料理人平五郎呼び、法事料理あつらへる。」

同九日「長谷川雪堤子来る。仏事まんぢうくばる。」

同十一日「平吉宝泉寺へ遣ス。但法事回向料百疋為持遣ス。おばア三、像掛物出来る。」

月岑の祖母の画像が出来てゐたのである。或は斎藤家には、幸雄、幸孝等の画像も出来てゐたのではあ

るまいか。

同十三日「昌麗法尼一周忌逮夜。客来飯塚氏、普勝氏、安間氏。」

同十四日「曇り。昼過仏参いたす。小網町靈岸島ねへ三、家内一同参る。」

同廿日「天気よし。六阿弥陀へ行。つれは上田久之助殿、文之助殿、寿阿弥法師、森江徳左衛門殿、大森某、市左衛門六人也。」

寿阿弥曇齋がこゝで初めて顔を出す。寿阿弥のことは森鷗外博士に精しい研究があるが、月岑の翟巢漫筆第二十六冊にもこの人のことを書いてゐる一条があるのを、ついでにこゝに載せておかう。

「寿阿弥曇齋師の事思ひ出たればしるしつ。

須田町貳丁目ましや（註。長岡）といへる菓子屋の子也。（註。水戸様御出入くわしや）

蕙齋云。寿阿は北尾紅翠斎重政の子也。（分註。重政は浮世絵師、はじめはすはらや茂兵衛の召仕也）藁の上よりましやにてもらひうけし由也。

しかるにいかなる故にや、諸方へ養子になりたり。麴町千葉某の家に養子になり。身代を傾け、又四谷の辺御家人の家にも養子になりたり。元来芝居好にて、松本高（幸）四郎蟲負也。高四郎が鬼王団三郎の真似して、麻上下の古きを着し、朱鞘の刀を帶し、具足櫃を負ふて歩行し事もありし由。

芝居の作者ともなりて、鼠衣の儘歌舞妓へも携りし人也。

三ツ五郎の門けいせい朝妻舟の文句など尤よろしと見ゆ。

後年藤沢派の沙弥にて、御連歌の執筆を勤たり。」

同廿六日「大工来り、湯殿ねだはる。」

同廿七日「大工来り、湯殿はめはる。」

九月廿五日「長谷川雪旦子来る。当月十五日奥州より被帰候由。」

十月四日「茂太郎子と同道にて、幸雄居士御年回寺参に行。尤法事は八月に取越候。」

月岑の祖父幸雄は寛政十二年十月四日、六十三歳にして歿し、この年は二十年忌になるのだつた。

同八日「丸角にて久次郎差初脇差巾着とる。わきざし廿匁五分、巾着九匁六分也。」

同廿六日「天気よし。勸進能三日目見物に行。上田氏懇意太田助市世話にて、二階棧敷南の十六にて見物いたし候。割合老人前八匁五分、但弁当供、外に供弁当老匁。」

同廿八日「長谷川氏へ行。雪旦子在庵。」

十一月二日「長谷川雪旦子名所図会校合に来る。夜帰る。夜廻りに始て出る。」

江戸名所図会のこと、こゝに初めて出る。上に、被布を着た坊主頭の男が筆を手にしてゐる横向きの略画が描かれてゐる。

同五日「久次郎髪置の祝ひ也。朝明神様へ参り、飯塚氏、片岡氏へ行。昼過付木店、小網町遠藤氏へ行。中村やへも行。」

上に、「久次郎いらい」として、駕籠の行くところが描かれてゐる。

同六日「雪堤子七時頃来る。」

上に、坊主頭の男の後向が描かれてゐて、「雪堤」の註記がある。雪堤も剃髪してゐたことが知られる。